

形象と喩 (二)

長野隆

3

仕切を設けて円陣を築く風習が、人為による聖域デメノスの最初の獲得だった。

そして冬が、単調な雪に包まれて訪れる時に、
僕はいたるところの鎧戸をしめカーテンをおろすだろう、
夜の中に僕の妖精の宮殿を築くために。

.....

(ボードレール)

自然が未だ均質な響きを詩人に与え、彼の心を色彩がうるおしている間は、聖域デメノスは彼自身の革命の場とはならない。詩人は生暖かく洋燈に映し出された「妖精の宮殿」に棲みつくのだ。「冬」と「夜」のシノニムが彼の「宮殿」を隠喩の中へ導き入れる。かつて「地上の放浪者」(創世紀)達は、見えない庇護屏の内側に立ち、盲目の意志に追従した。「禁制の領域」は決して与えられた、ためしがないからだ。彼は「いたるところの鎧戸をしめカーテンをおろす」す。行為が其処で心音を告げると、初め

て詩人は「意味」の自立を知るのである。

二重の部屋

一つの部屋、謂わば夢想にも似て真に霊的と呼ぶにふさわしい部屋、中に澱んだ大気はうつすらと薔薇色と青色とに彩られている。そこに魂は、悔恨と欲望とで香味をつけられた、怠惰の沐浴の中に涵る。

.....

(ボードレール)

聖域は密度の高い香気に充ち、夢想の自由な営みを育む。時間に支配されない深刻な腐敗が「場」に彩を添えるのだ。詩人の存在の外化を指示すこの「場」の形象は、聖域と外界との境界に於て大担に彼の歴史を分つ。彼は停止した時間を歩みながら敢えて「禁制」の紐を解こうとはしない。謂わば夢想のために世界を局限するのである。

「内」なる腐敗が蘇生を促す最上の術であることを、詩人は承知していた。「内」は詩人の存在を抱きかかえ、「居住」の保障と「死滅」への契約を青白く演出する。そこで例の如く一つの思い付を彼は実践する。彼は突然〈窓〉を締め〈戸〉を閉じたが、その直後、沈黙の背理構造に支配されるはめとなる。段階が着実に次の行動を呼び寄せるように、壁に向かって歩みはじめ、一方の錠を綿密に確かめると、窓辺に立ち、窓枠を通して部屋の暗部へ侵入する光の量を窓掛によって調整する。今、彼は「内」と「外」とが織成す不可解な平衡を自己が支えようとしていることに気付くだろう。なぜなら、彼は「行為」を親密に所有できるからだ。

聖域の境界をめぐる静かに迫り来る様々な陰影さえも、この固有に内なる形象を侵略することは

できない。形象が所有者に従順であり切実であればあるほど。

*

聖域テメノミの侵略は「所有」の転換によってもたらされる。

「室房形態」と人との対話がとぎれたとき、詩人は夢想の最も遠い縁へりに立たされる。次第に彼は忘れようとした歴史を取戻し、いたずらに倦怠の沐浴を欲しようとはしなくなる。時間の堅実な歩みを数えはじめ、鼓動の切実な訴えを見とどげようとする。周囲は次第に精彩を失い、形象の背後へと隠れこむ。詩人は投げ出される。彼の被造者感情が眼覚めるのだ。

心酔させる笑い声は、牢獄ひとやにみちて、

詩人の理性を、怪奇へ、不条理へといざなう。

「疑惑」は詩人をとりかこみ、滑稽な「不安」と

長い「恐怖」が、詩人の身をめぐって流れる。

……………

(ボードレール)

倦怠が有意義な逆説を経て、聖域が牢獄に変容したとき、彼は再び創世記の放浪者となり、ピンのように形象の直中に立たされる。蘇生をたむける意志が凜然とした形象の中心に在る限りは。

それは固く閉ざされた牢獄ひとやに囚えられてあり、自然さえも、巧緻なる術に助けられるにあらざれば、そこから(胚種としての化金の)水銀を引き出すことはかなうまいと思われる。

されどこの術は何をなすのか。勤勉な自然の巧妙きままる主宰者であるそれは、蒸気の火をもって、牢獄へ至

る小路を淨める。自然を助け、われらの水銀がいわば繫縛されている綱を断ち切る力を自然に与えるには、絶えることない穏やかな熱より以上に良い案内者はなく、確実な手段もないのである。

……………
(註)
(マルクIIアントニオ・クラッセム)

「意志」の水先案内人は、疑いのない懷疑者でもあった。

4

戸

すべての戸は、二重の空間で仕切られてゐる。

戸の内側には子供が居り、戸の外側には宿命が居る。——これがメーテルリンクによつて取り扱はれた、詩劇タンタジールの死の主題であつた。も一つ付け加へて言ふならば、戸の内側には洋燈が灯り、戸の外側には哄笑がある。風がそれを吹きつける時、ばたばたといふ寂しい音で、哄笑が洋燈を吹き消してしまふのである。

(朔太郎)

〈戸〉の開閉が人の実存を左右する仕組は、例えば「閨門」の觀念に類比される。宿命としての「路」の選択を〈戸〉を開ける勇氣になどすることもできる。「場」の空間的庇護性が断たれたとき、厳肅な通過儀礼が此処で一瞬時に試されるのだ。我々はこの恐怖をぬぐい去ることができない。

しかし、ぞっとするようなノックの音が、今や重たく扉に鳴り響いた。／楽園の部屋、偶像の女、夢の国の女王、かの偉大なルネの呼びなした「空氣の精」、すべてこれらの魔法は、「亡霊の手荒なノックの響きと共に消え失せてしまった。……………

(ポードレール)

「希望」を象徴するという〈扉〉を詩人は持たない。〈戸〉は永遠に自己を閉ざしたまま「意味」をかざすのだ。〈戸〉の實在の量度は〈壁〉に比肩され、「鍵穴」の秘密が彼の威厳を監理する。〈戸〉は自然の空間的摂理に最も叶った「通路」の祖型である。

見よ、私は戸の外に立って、たたいている。……………

—— 黙示録 ——

*

門

門だけが、ひとり空間に浮んでゐる。夢のやうに高く、永遠の時間の中で、ふしぎな巨獣のやうに構へてゐる。……………

(朔太郎)

沈黙の「場」に訪れる者は、まず〈門〉をくぐらなければならぬ。〈門〉が〈戸〉に対して開き明かすものは「場」の内奥に宿る神話の威儀である。〈戸〉に向かって幾つかの〈門〉が直列して配置されれば、訪問者は其処に「艱難」の諭を読みとり、〈戸〉に対して並列に並んでいれば「迷妄」の諭を見出す。前者は「力」を、後者は「意志」を止揚する。〈戸〉と〈門〉をはさむ距離空間の密度は、正に「場」の内密性に直結している。故に〈門〉の前に立った訪問者はいずれかの設隠を真剣に受け入れなければならず、〈門〉の指標に順って禁制の領域へ第一歩をしるす。空間(場)の領域性が境界によって意味付けられる仕組は必然的に「通路」の内属を解き明かすのである。

*

坂は、坂の上における別の世界を、その下における世界から二つの別な地平線で仕切つてゐる。

(朔太郎)

〈坂〉は「道」^(密)を空間の高低に掛けて語る唯一の自然的形象だ。人が人生を「道」に見立てる発想は、〈坂〉の作用的實在性に依り、極度に倫理的色彩を帯びる。「道」を歩くという動態性が通過儀礼の内面形式に喩を連ねるからだ。だが、詩人は〈坂〉の自存的實在を見た。彼は神話の中で形象を捉えたのだ。

時に彼は夢を見た。一つの梯子^{はしこ}が地上に立っていて、その頂は天に達し、神の使^{つかい}たちがそれを上り下りしているのを見た。……………

「これはなんという恐るべき所だろう。これは神の家である。これは天の門だ。」

——創世記——

神秘的「通路」としての喩の起源はヤコブの見た〈梯子〉に始まる。天界と下界とを分つ不可侵の境界を〈梯子〉や〈階段〉が接ぶのだ。自然的な領域の不可侵性は、空間の縦の軸に於て絶対的保障を受けるからだ。仮に「虹」の橋を渡る希望の使者達がブリズムの幻影を信じて此岸と彼岸を渡り切ったとしても、彼等は恐らく希望の書を神に託すことはできない。〈橋〉には、その両端で空間の位相を転ずるほどの力は与えられていないのである。

引き返すことのできない「通路」——背後の世界を切断する道程——は、或る一瞬時に現出する世界を予想させる。偉大な神秘主義者の見た「奈落」への行程が、心音の確かな導きとともに縮小して行くのだ。

〈洞穴〉や〈隧道〉の作用形式が生む「迷路」や「暗箱」の抽象。これ等原初的投影を、我々は未来に於てなお、詩の図像学に見出し続ける。

(未完)

(註)「闇よりおのずからほとほしる光」(ヘルメス叢書) 有田忠郎訳)より。

○ボードレールの邦訳文は福永武彦氏のものに拠った。